

## 岐阜県にのこる能・狂言面の調査

平 光 明 彦

### はじめに

岐阜県は、中世期において越前猿楽・近江猿楽芸団をもった福井・滋賀両県と隣接しており、能楽資料の宝庫であるときえいわれている。しかし、能楽資料についての調査報告は、「岐阜県指定文化財調査報告」などに部分的にみられるだけで、総合的な調査報告はなされていない。幸い当館では、特別展「能面と装束」を実施するに当たって、中世から近世期にかけて、県下の社寺で神事能として行われていたであろう能楽資料について総合調査を実施することができた。能楽資料は、能・狂言面 能装束類、小道具類などに分類されるが、ここでは、能・狂言面についてとりあげた。

県下の能楽資料はその発生の性格から、越前猿楽・近江猿楽などとかかわって発生したとおもわれる「美濃山岳地域にひろがる能」と関刀鍛冶の発展にもなつて伝えられてきた「大和猿楽の流れをくむ関春日神社の能」に分けられるが、関春日神社の能面は、「岐阜県指定文化財調査報告書第20巻」に詳細な報告がなされているので、割愛させていただいた。なお舞楽・神楽など他芸能の面についても、若干調査をしたので、併せて、その記録を取録した。

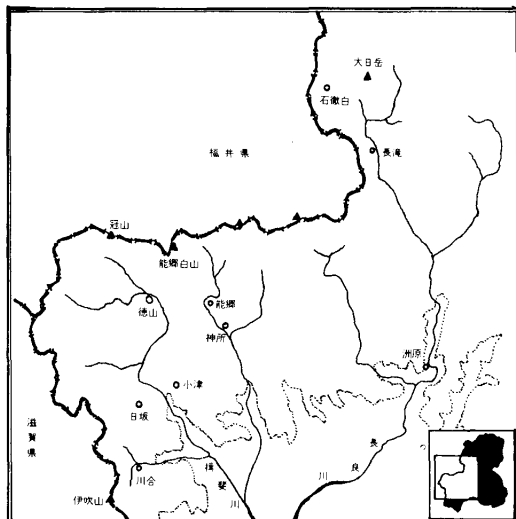
この調査に当たり、中村保雄氏（能楽研究家）には、格別の指導を受け、また資料所蔵の各神社代表の方々や市町村教育委員会には、格別の御協力、御便宜を図っていただいたことに対し、厚くお礼申しあげる次第である。

### 美濃山岳地域にひろがる能

ここで美濃山岳地域と総称した地域は、右図に示した揖斐川・長良川の上流の地域をいい、揖斐郡・本巢郡・郡上郡の山間部で、大日岳にはじまり能郷白山・冠山など1,000m以上の山なみをひかえているところである。

中世期には、越前猿楽は加賀・越前・美濃の白山神社の祭礼に参加することを重要な任務としており、これを母胎として芸団の発生と成長があったと考えられる。このことは白山神社の美濃馬場である長滝白山神社の慶安三年(1650)3月11日奥書の冊子に“修正延年之次第”とあって「越前大和五郎大夫12月に当地へ来たり、極月25日寺家衆も稽古して七番能有云々」とあって、越前猿楽が美濃と深くかかわっていたことがわかる。一方、揖斐地域は、近江にも隣接していることから、近江猿楽も当地へ浸透していたと考えられる。

長滝白山神社をはじめとして石徹白山中居神社・洲原神社・能郷白山神社・神所春日神社・日坂春日神社・小津白山神社などには、鎌倉時代から室町時代の資料が数多く残されている。とりわ



け室町中期までの古い面は、後世の幽玄な雰囲気を持ち、喜怒哀楽も表現しやすい様式化された面とはちがって、表情豊かな個性的な作風を示しており、全国的にみても注目されるものが多い。また室町末期以後、世襲面打として活躍した越前出目家・近江井関家作の面なども存在していて、時代が下っても演能が続いていたことがわかる。現在でも能郷白山神社では4月13日の祭礼に能が奉納されており、能大成以前の旧態を示す能ではないかと考えられている。


### 1. 長滝白山神社

郡上郡白鳥町長滝に鎮座。社伝によれば、泰澄大師の白山修験のおり、この地が神明影響の地とされ、白山中宮長滝寺を造営したという。後の養老6年(722)にあらたに本地の二字が加わり、白山本地中宮長滝寺と改められた。白山登拝の美濃側の拠点である。特に鎌倉期以後美濃馬場として隆盛をきわめたが、それは常に山に千人、麓に千人も居住するとさえいわれたほどであった。

神社には、すぐれた文化財が数多く残っているが、そのうち「能」に関するものでは、南北朝ころの制作と考えられる若い女(延命冠者)の佳作や、年紀を記する尉(応安2年)、女(文明2年)、白色尉(天文11年)、喝食(元和2年)の4面、それに狩衣(元和6年)二領など地方能狂言の研究上特に注目されるものである。

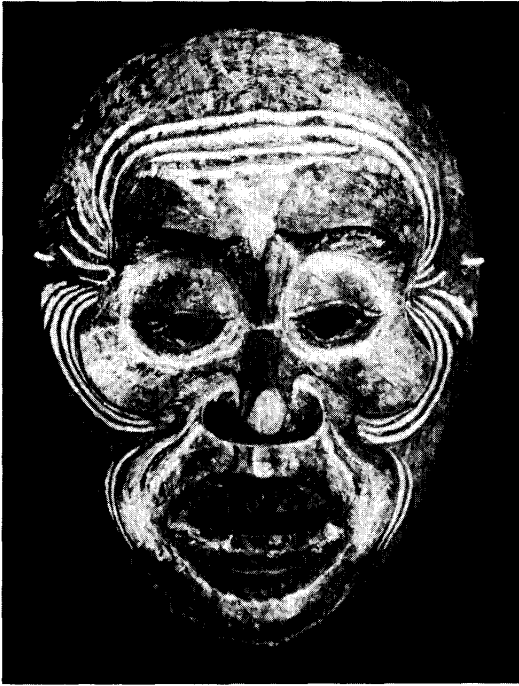
No.	名 称	寸 法 (cm)	材質構造等・彩 色		銘 記
1	白色尉	縦 18.1 横 15.2	檜材、顎別材 鬚植毛痕 裏面黒漆塗	胡粉地肉色	白山妙理大権現 奉納所也妊 天文十一年 五月廿六日 酒忽作 左□(花押) 駿河国住人 (刻面)
2	女	縦 22.4 横 14.0	檜一材 裏面素地	胡粉地白肉色 眉目唇補彩	白山御宝前 <sup>大権現</sup> <sub>敬白</sub> 奉旋入一面 〃 文明二 <sup>年</sup> 十二月 吉日
3	尉	縦 21.2 横 15.0	桂一材 頭髮及び鬚植毛痕	灰白色肉色 齒黒 暗朱唇	應安二年 宗因 十二月廿八日 観音圖 奉施入□□□ (墨書)
4	喝食	縦 19.5 横 13.8	檜一材 裏面吹漆	胡粉地肉色 朱唇、齒及び頭髮 黒、剥落が著しい	越前国 大旦那北之因 奉寄進 白山御宝前 元和二 六月日 息災延命(墨書)

No.	名称	寸法 (cm)	材質構造等・彩色		銘記
5	女	縦 20.5 横 14.7	檜一材 裏面素地	胡粉地肉色 朱唇, 齒黒 現肌色は補彩 剥落著しい	白山御□□□□ (後刻) (刻銘)
6	若い女	縦 17.5 横 13.8	桂一材 裏面素地	肉色, 髪黒漆塗等 彩色は, 後補	
7	延命冠者	縦 17.6 横 14.1	桂一材 鬚植毛 裏面素地	彩色剥落	白山奉施入 (墨書)
8	女	縦 19.8 横 13.3	檜一材 裏面素地	彩色剥落	
9	白色尉	縦 14.1 横 15.6	檜材, 顎別材 (欠失) 裏面素地	彩色剥落, 全体に 黒ずむ	
10	白色尉	縦 13.8 横 14.5	桂材, 顎別材 (欠失) 裏面素地 鼠害各所にあり	彩色剥落	
11	若女	縦 20.7 横 13.7	檜一材 裏面素地	彩色後補	鳥 (墨書)
12	若女	縦 20.0 横 12.9	檜一材 裏面素地	殆んど補彩	□□□ (いずれも花押 か) (刻銘)
13	阿古夫尉	縦 19.5 横 14.8	桂一材 裏面素地	褐色系肉色	
14	尉	縦 21.0	檜一材 両側欠失 裏面素地	素地	
15	黒色尉	縦 13.8 横 14.4	檜材, 顎別材 (欠失) 裏面古色	黒色	
16	尉 (断片)	縦 20.0	檜材 左半面のみ 裏面素地	朱唇 赤系肉色	

No.	名 称	寸法(cm)	材質構造等・彩 色		銘 記
17	鬼神 (名荷悪尉)	縦 19.8 横 155.0 (現状)	檜一材, 金環 (右目分欠失) 両側欠失・裏面黒塗	赤系肉色 (鼻梁の 下地紙貼)	
18	尉	縦 22.3 横 16.6	桂一材 裏面素地	淡彩 (殆んど素地)	
19	鬼神(飛出)	縦 21.1 横 14.9	檜一材 両眼金環欠失 裏面素地	朱系肉色 髭鬚墨	中□  (墨書)
20	鬼神(飛出)	縦 20.6 横 15.1	檜一材 両眼金環欠失 裏面黒漆塗	彩色剥落	— (刻銘)
21	鬼神(飛出)	縦 20.7 横 14.7	檜一材 両眼金環欠失 裏面素地	朱系肉色 (剥落)	
22	獅子口	縦 21.8 横 18.1	檜材, 顎別材 (欠失) 鼻梁欠失 歯箔押銅板打付, 髭鬚植毛痕 裏面素地	胡粉地暗朱色 眉髭墨	
23	癒見	縦 18.4 横 16.0	檜一材, 両眼金環欠失 裏面素地	黒漆地朱漆塗	
24	癒見	縦 22.6 横 15.8	檜一材 鼻及び左縁大きく 欠失 裏面素地	朱漆塗	
25	童子形	縦 22.0 横 14.8	朴(か)一材 裏面素地	彩色剥落	奉施入 若衆中 (墨書)

この項と、後述の能郷白山神社の記録は、昭和45年1月文化庁刊「白山を中心とする文化財 岐阜県」による。





尉 (3)

裏面に「応安二年(1369)十二月廿八日」の墨銘がある。この時期は猿樂の大成者・観阿弥が活躍していたころである。

頭部の植毛、顔に刻まれた皺に特色があり、その容貌は田舎の好々爺を思わせ、様式化された端正な尉とは趣を異にする。尉面の祖型をなしているものと考えられる。



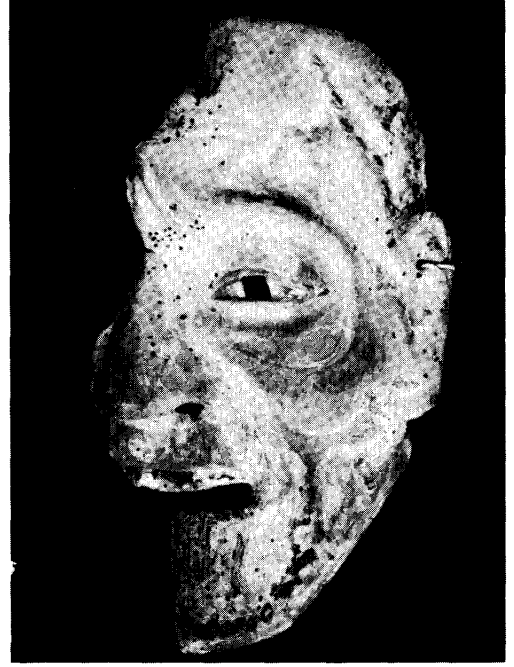
若い女(延命冠者) (6)

この面は、奥州中尊寺の鎮守、白山神社に奉納されている若女面とよく似た相貌をしている。このことから修験者との関係を示す資料として特に注目されるものである。作行からして南北朝ころの製作のものと思われ、への字形にくり抜かれた目は翁系延命冠者に近い表情をしていて、珍しい女面である。



白色尉

(1)



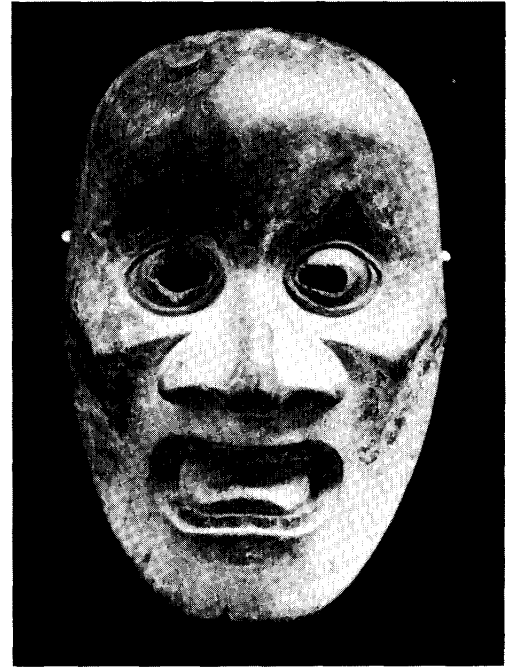
尉

(16)



鬼神（悪尉）

(17)



鬼神（飛出）

(19)

## 2. 石徹白白山中居神社

郡上郡白鳥町石徹白上在所に鎮座。白山への登拝口として、養老年間（717～723）白山を開踏した泰澄が社殿を修復し、社域を拡張した古社である。境内には老杉が樹立していて長い信仰の歴史を伝えている。

白山登拝者はここに参拝し、更に銚子が峰・一ノ峰・二ノ峰・三ノ峰を経て別山に至り、主峰御前峰に通ずる峻しい山路を登りつめていった。明治維新の神仏分離令以前は、本地仏としての虚空蔵菩薩像をはじめとして、多数の仏像が安置されていた。そのうち特に金銅虚空蔵菩薩坐像（大師堂に安置）は等身の銅像で、形制の整った佳品で、往時の盛行をうかがうことができる。

仮面は6面残っているが、うち2面に与十郎の銘記があり、近江猿樂の進出をうかがうことができ、特に注目された。

No.	名 称	寸法(cm)	材質構造等・彩色		銘 記
1	父 尉	縦 18.5 横 14.7	顎別材（欠失） 鬚植毛（切れ欠失） 裏面素地	胡粉地白肉色 唇朱、眼廻、髪墨 鼻梁・顎・額部剥落	日 与十 郎作 （墨書）
2	若い女	縦 19.9 横 12.6	檜一材 右側部欠失 裏面吹漆	胡粉地白肉色 朱・髪墨・齒黒	天正八二月日 八木山 <small>山</small> 蔵 白山崇（刻銘）
3	老年の女	縦 22.0 横 13.8	一材 眼部は別材を入れる、左側部欠失 裏面素地	胡粉地肉色 唇朱・齒墨・髪墨	
4	若い男	縦 19.3 横 13.7	一材 裏面吹漆	胡粉地肉色 （剥落） 唇朱	
5	鼻 高	縦 25.0 横 20.6 高 29.0	鼻眼部別材 両眼金泥 裏面素地	朱漆	与十郎 作 （花押） （墨書）
6	古 面	縦 20.5 横 18.5	鼻部別材 裏面素地 土俗性の強いもので、悪魔払い・雨乞い等の神事に使用した ものか。鼻が動く。	朱系肉色 （剥落）	



父尉 (1) (面裏)

面裏に「日 与十郎作」と墨書がある。このことから、近江猿樂日吉座の与十郎の作かあるいは所蔵であったことがわかる。室町時代末の作である。



若い女



老年の女

(3)

(2)



若い男

(4)



古面

(6)

### 3. 須原洲原神社

美濃市須原に鎮座。社伝によれば、養老年間白山に修験した越前の僧・泰澄の勧進により白山前宮として創建されたといわれる。加賀・越前・美濃にまたがる霊山・白山登拝をめざす美濃側の馬場は、長滝白山神社であり、白山本宮に対してここを中宮とし、洲原神社はその前宮となるものである。東海道筋などから白山登拝をめざす多くの白山講の人々が、この洲原神社に参詣した。

No.	名称	寸法(cm)	材質構造等・彩色		銘記
1	鬼神(悪尉)	縦 21.0 横 16.0	檜一材 両眼金環 髭鬚植毛 右額部フシあり 裏面素地	黄褐色系肉色 齒黒、唇朱 右額部鼻梁部剥落	越前出目家初代満照の鉤目あり
2	鬼神(癒見)	縦 21.0 横 16.4	檜一材 髪・鬚墨 裏面黒漆塗	胡粉地朱系肉色	
3	鬼神(癒見)	縦 18.8 横 14.5	檜一材 両眼金泥 裏面吹漆	下地黒漆・上彩色 朱漆 両側頬剥落	



鬼神（悪尉）

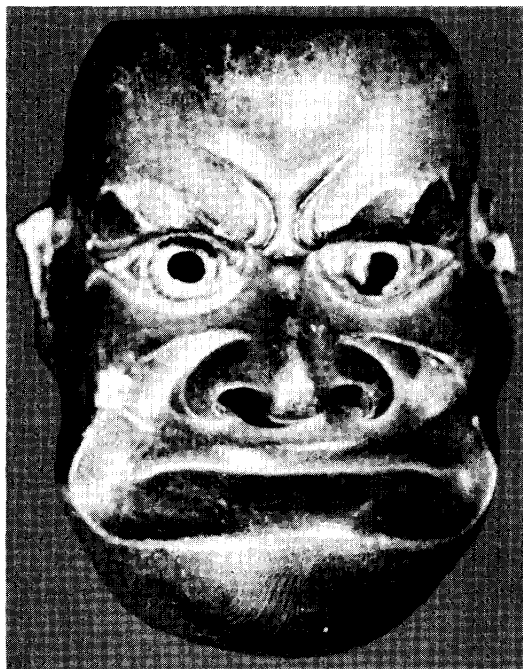
(1)



鬼神（悪尉）の面裏（部分）

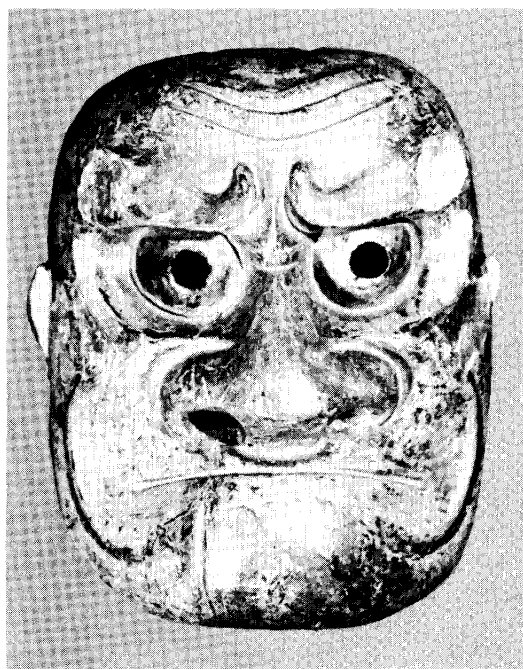
この面には、代表的な世襲面打家越前出目家の初代満照の「知らせ鉦目」がある。面裏写真のとおり、鼻部に十本の刻線が縦に並んでいる。これが出目家満照の「知らせ鉦目」である。

このように面打が自分の作であることをしるすために、銘を入れるかわりに、記号化された鉦目を入れていることがある。



鬼神（癡見）

(2)

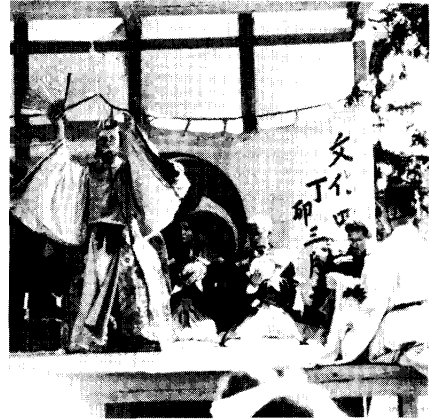


鬼神（癡見）

(3)

#### 4. 能郷白山神社

本巣郡根尾村能郷に鎮座。福井県境に位置する能郷白山(1672m)を奥の院とする。社伝によると、養老元年(717)に泰澄大師により創建されたという。朱雀天皇の寄進といわれる法華経・金光明経や各種の和鏡・在銘(文明12年・1480)の梵鐘があり、また時代は下がるが、聖観音像・虚空蔵菩薩像も祀られていて、平安時代から江戸時代にかけて白山信仰がいかに盛大であったかがうかがえる。能狂言面は大部分は江戸時代の作であるが白色尉・蛇などは室町時代以前の古面である。また多数の能装束が残っているが、大半は江戸時代中期ごろから末期にかけてのものである。これらの能狂言面や装束を現在も使用して、毎年4月13日の祭礼に演じられ、古式の形態を残して今日まで伝えている。この神事芸能は、この神社の氏子16軒の人々によって、シテ、ワキ、ツレ、笛、太鼓、小鼓等の役割で厳しく世襲されてきた。過疎化の波に対して近年、この芸能を継承すべく教育委員会、保存会で懸命に努力されている。



No.	名 称	寸法(cm)	材質構造等・彩 色		銘 記
1	白色尉	縦 13.7 横 14.4	木製、顎別材 (欠失) 裏面素地	胡粉地肉色 (剥落)	
2	蛇	縦 19.1 横 12.9	堅木一材、角亡失 頭頂・顎左側欠損 裏面吹漆	胡粉地肉色(現状 その上に補彩) 牙箔押	
3	黒色尉	縦 17.4 横 14.5	桂材(か)、顎別材 厚手、眉髭鬚植毛 裏面黒漆塗	胡粉地黒色 唇朱漆	
4	白色尉	縦 20.5 横 15.4	桐材 顎別材	白色 (現状は当初材の 上に紙貼補彩)	

No.	名 称	寸法(cm)	材質構造等・彩 色		銘 記
5	尉(小牛尉)	縦 20.8 横 15.7	檜材 頭髮, 鬚植毛	胡粉地黄褐色肉色	
6	尉(石王尉)	縦 21.0 横 15.3	檜一材・鬚植毛 裏面吹漆	胡粉地黄褐色肉色	
7	若い女(若女)	縦 21.0 横 14.1	檜一材 裏面吹漆	紙貼胡粉地肉色	
8	白色尉	縦 19.4 横 14.2	檜材, 顎別材 鬚植毛	胡粉地肉色	
9	泥 眼	縦 20.5 横 13.2	檜一材 裏面素地	肉色彩(剥落)	
10	童 子	縦 20.8 横 13.4	桂(か)一材 裏面素地	胡粉地彩色	
11	白色尉	縦 18.1 横 14.4	檜材, 顎別材 鬚植毛 裏面素地	赤系肉色	
12	般 若	縦 20.9 横 15.5	檜一材, 角亡失 両眼金環(欠失) 裏面吹漆	絵紙貼肉色	
13	蛇	縦 22.5 横 17.7	檜一材, 角別材 裏面布	紙貼白色	(花押) (刻銘)
14	若い女 (小面)	縦 21.3 横 14.1	檜一材 左眉上方一部欠失 裏面吹漆	紙貼彩色	
15	武 悪 (狂言面)	縦 20.8 横 16.8	檜一材 裏面黒漆塗	朱の具色(現状紙 貼の補彩)	



No.	名称	寸法(cm)	材質構造等・彩色		銘記
16	獅子口	縦 20.0 横 14.4	檜一材, 両眼金環 歯牙銅板鍍金(大部分欠失) 裏面素地	金色系彩色	
17	顰	縦 20.6 横 17.6	檜一材 裏面素地	肉色, 瞳箔押, 歯牙金泥	
18	若い男 (中将)	縦 21.4 横 15.9	檜一材 裏面素地	彩色	申二月廿八日 大仏師 ミの岐阜 田中惣左衛門 作 <sup>リ</sup> 也
19	空吹 (狂言面)	縦 19.9 横 13.8	檜一材 裏面黒漆塗	胡粉地褐色系肉色	
20	空吹(か) (狂言面)	縦 19.8 横 12.8	木製 裏面黒漆塗	彩色剥落 古色	
21	乙(狂言面)	縦 20.5	檜一材, 右半面の み残る, 裏面漆塗	現状漆下地のみ	



白色尉

(1)



蛇

(2)



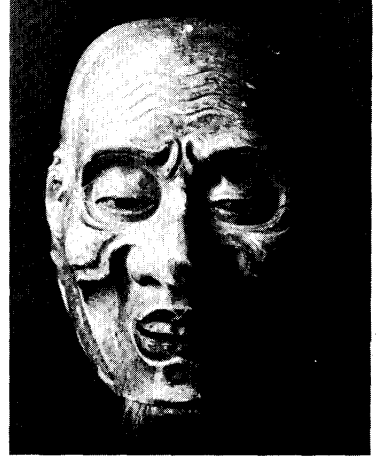
黒色尉 (3)



白色尉 (4)



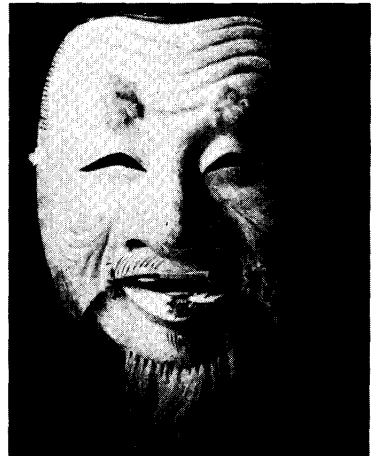
尉 (小牛尉) (5)



尉 (石玉尉) (6)



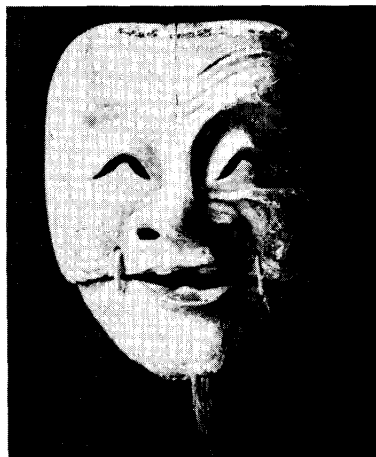
若い女 (若女) (7)



白色尉 (8)



童子 (10)



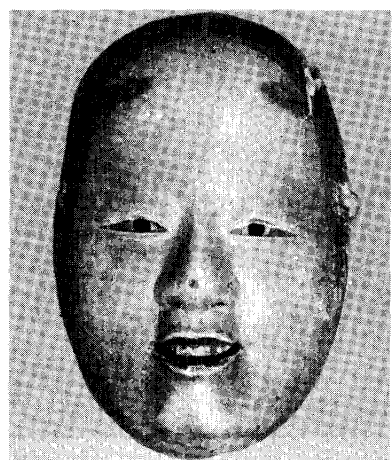
白色尉 (11)



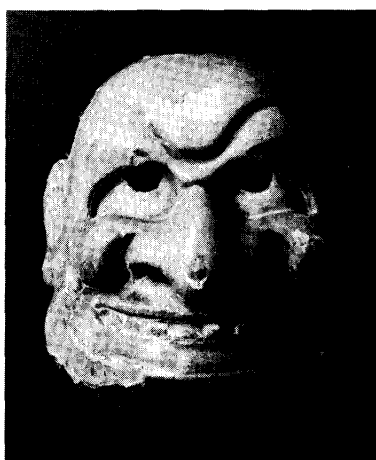
般若 (12)



蛇 (13)



若い女 (小面) (14)

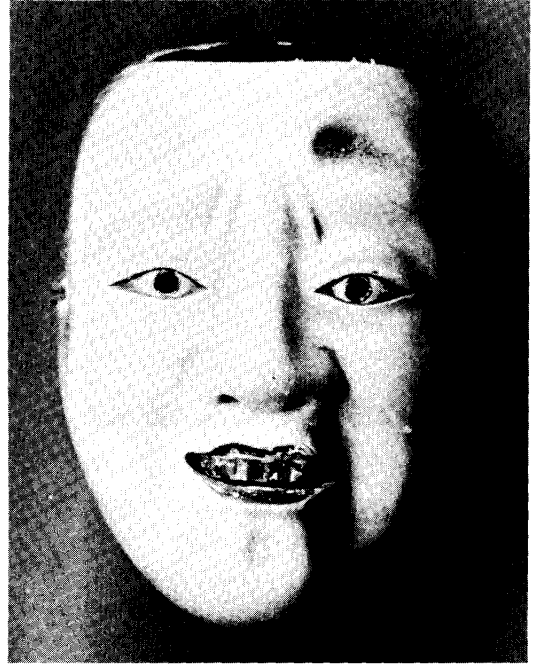


武悪 (狂言面) (15)



頻  
卑

(17)



若い男（中将）

(18)



空吹（狂言面）

(19)



空吹（か）（狂言面）

(20)

5. 神所春日神社

本巢郡根尾村神所に鎮座。縁起書によると、延喜2年(902)醍醐天皇の王子が当地に配流されたおり、従臣川口平馬丞が奈良の春日大社の四所大明神を勧請して慰めたのがはじまりという。その後、元龜年間に根尾右京が社殿を修復し、元禄13年(1700)に大垣の戸田氏定が再建した。根尾谷が日照りの時、この春日神社に雨乞いの願をかければ雨が降らなかつたことはなかつたという。

能楽関係資料としては、華麗な意匠からして桃山文化の粋ともいえる紺地白鷲葦文繡直衣一領と狩衣二領、角帽子二頭それに室町末期の能面6面がある。能郷白山神社に近いこととあわせて、室町時代から江戸時代にかけて能が演じられていたことと考えられるが確証はない。

能面6面のうち、尉、癒見の二面には「驍」の銘があり、小癒見は銘はないが彩色やヒゲの表現方法など製作技法からみて、この三面は前述の洲原神社の悪尉面と同じ越前出目家の初代満照の作である。この三面は保存状態もよく、室町末期の能面では県下の資料のうちでも秀作の一つであろう。

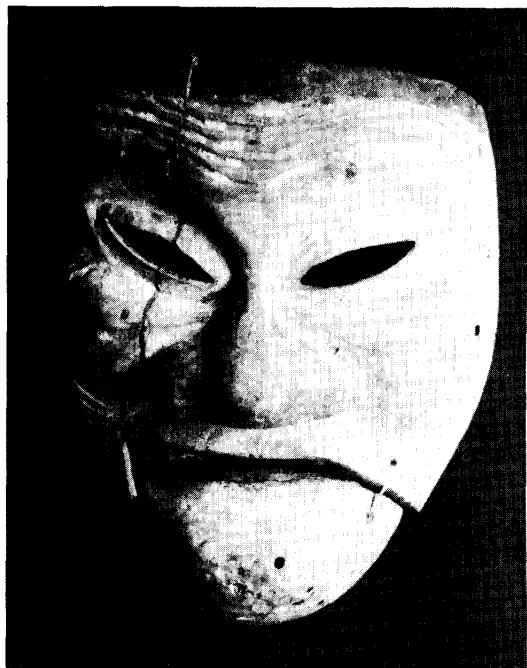
No.	名 称	寸法(cm)	材質構造等・彩色		銘 記
1	父 尉	縦 18.0 横 15.0	木製(顎別材) 裏面素地 右側部にワレ (補修)	胡粉地白肉色 (剥落)	
2	黒色尉	縦 14.0 横 12.5	木製 (顎別材一欠失) 裏面素地 眉髭植毛痕	墨	
3	若い男	縦 21.0 横 15.0	一材 裏面素地	胡粉地のみ若干の こる、厚手の作	
4	尉	縦 21.0 横 15.5	檜一材 髪髭鬚植毛 裏面素地	胡粉地黄土系肉色 (雲母混合) 眉眼墨 唇朱	驍 (墨銘)
5	鬼神(癒見)	縦 21.0 横 17.0	檜一材 裏面黒漆塗 両眼金環 左耳部破損	胡粉地朱系肉色 (和紙下張り)、雲 母混合) 隅取り、唇朱	驍 (朱銘)

No.	名称	寸法(cm)	材質構造等・彩色		銘記
6	鬼神(癒見)	縦 19.0 横 15.5	檜一材 裏面素地 両眼金環(左欠失)	胡粉地朱系肉色 (和紙下張り) 髮眉髭鬚墨	
7	紺地白鷺葦 文繡直衣	縦 139.0 横 162.0			
8	茶地草花文 金欄狩衣	縦 133.0 横 127.5		金糸わずかにのこ る	
9	茶無地文狩 衣	縦 103.0 横 133.0			
10	角帽子	縦 78.0 横 21.0	二頭		



紺地白鷺葦文繡直衣

(7)



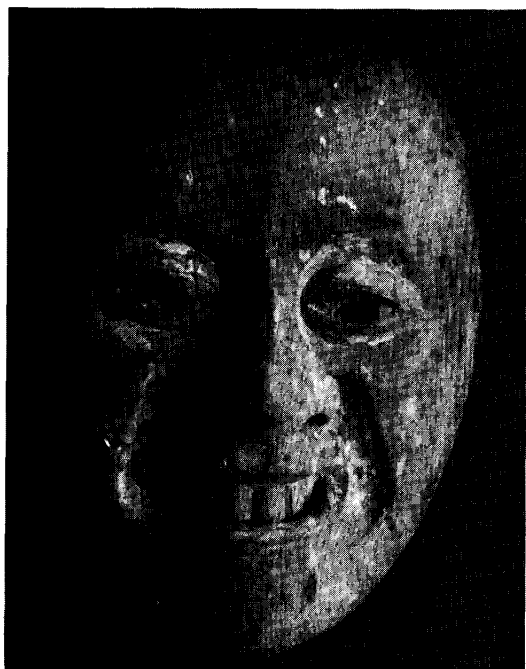
父尉

(1)



黒色尉

(2)



若い男

(3)

この三面は、あとの(4)・(5)・(6)に比べると、簡素な作風を示している。しかし、それぞれに個性があり注目されるものである。

父尉は、目・鼻が大ぶりの表現で力強い作品であり、黒色尉は、荒い刀痕に単純な皺と右へ大きくゆがんだ鼻がよく調和している。若い男は、能面としてはやや厚手の作であり、彩色がほとんど剥落しているが、形式的な表現の中に、大らかな容貌がしのばれる。



尉

(4)



尉 (4) (面裏)

面裏に「驍」の墨銘と前述の洲原神社の悪尉面と同じ知らせ鉋目がみえる。下段左の鬼神も同様である。越前出目家満照は、室町末期天文のころに活躍した面打である。



鬼神（癡見）

(5)



鬼神（癡見）

(6)



6. 日坂春日神社

揖斐郡久瀬村日坂北尾佐に鎮座。社伝によれば、神社の創建は奈良時代の天平年間(729~748)とされ、その御神像は、鎌倉時代の作と考えられる男神女神の二軀の木彫である。また境内薬師堂の薬師如来坐像、広目天・多聞天像は鎌倉末から室町時代の作である。これらのことから、中世にこの日坂が相当の集落をなし、文化も栄えていたと考えられる。

この神社には、室町期の能面類21面が残されており、これらの多くは古様の形態を示し、現行の能面の分類にあてはまらないものである。悪尉・怨霊の大型の面、老年の女など写実性の強い面など仮面の伝承、変遷史上に特に注目されるものである。一方、越前出目家初代満照や近江井関家の手になる面もある。延享3年(1746)の記録によれば「中古高橋筋之者当村被参、下村之祭事のふ(能)と申事致被申のふの組<sup>ニ</sup>御座候処、近代のふ<sup>ニ</sup>止申候<sup>ニ</sup>下村の神事無御座候。依之私共弓講一所<sup>ニ</sup>仕」とあり、中古はいつごろをさすか判然としないが、かつて上村高橋筋のものと下村の氏子によって、能が演じられていたことがわかる。

No.	名称	寸法(cm)	材質構造等・彩色		銘記
1	白色尉	縦 16.0 横 15.9	顎別材(欠失) 裏面素地	胡粉地白色 唇朱、冠台、髭、 眼周黒	
2	父尉	縦 17.5 横 13.5	顎別材 裏面素地	胡粉地白色 唇朱、髭黒	
3	黒色尉	縦 16.6 横 13.7	顎別材 裏面素地 鼻頂部欠損 眉髭鬚植毛 鼻部の皺、上歯の 表現に特徴あり	吹漆(暗褐色) 朱	
4	尉	縦 21.0 横 14.7	檜一材 髪髭鬚植毛 裏面素地	胡粉地白肉色 唇朱 ミケン部にΩ形朱 線 眉、目、鬚、歯黒	
5	尉	縦 20.3 横 15.2	一材 虫蝕著しい 顎部欠失 裏面素地	胡粉地もほとんど 剥落し素地が出て いる	

No.	名 称	寸法(cm)	材質構造等・彩 色		銘 記
6	尉	縦 21.8 横 15.8	一材 頭頂部, 顎部欠失 裏面素地	胡粉地わずかに残 る	墨書がみられるが 判読できず
7	鬼神(悪尉)	縦 21.4 横 19.3	一材 髪髭鬚植毛 裏面素地	胡粉地茶系肉色 (剥落多い) 唇朱, 眉齒黒	
8	鬼神(悪尉)	縦 23.2 横 16.8	一材 両眼金環(欠失) 髪髭鬚植毛痕 裏面素地	胡粉地肉色 (剥落) 眉齒黒 唇, 鼻孔クマドリ 朱	
9	鬼神(悪尉)	縦 21.0 横 18.0	一材 両眼金環(欠失) 裏面黒漆塗 髪髭鬚植毛痕	胡粉地肉色 齒黒 唇, 鼻孔クマドリ 朱	
10	鬼神(飛出)	縦 21.0 横 14.4	一材 両眼金環(欠失) 右側部欠損 裏面黒漆塗	胡粉地赤褐色 唇舌赤 冠台髪眉髭鬚齒黒	イセキ◇ (刻銘)
11	鬼神(癒見)	縦 19.0 横 14.5	一材 両眼金環 裏面吹漆	胡粉地朱系肉色 眉髭鬚墨	
12	鬼神	縦 19.0 横 15.5	一材 両眼金環(欠失) 髭鬚植毛痕 裏面素地	胡粉地緑肉色 唇朱, 齒白色	
13	怨霊	縦 21.5 横 16.1	一材 鬚植毛 裏面素地 厚手の作	胡粉地わずかに残 る	

No.	名称	寸法(cm)	材質構造等・彩色		銘記
14	怨霊	縦 24.5 横 19.7	一材 裏面素地	胡粉地朱系肉色 唇朱 髪髭鬚齒黒	
15	怨霊(怪士)	縦 20.7 横 14.5	一材 両眼金環? (欠失) 裏面素地	胡粉地黄茶系肉色 唇朱 齒黒 剥落多し	越前出目家初代満 照のカンナメ 
16	怨霊(般若)	縦 21.5 横 15.5 総縦26.0 総横19.3	角別材 裏面素地	胡粉地肉色 (剥落多し) 髪齒黒, 角黒 眼周, 唇朱	面の彩色下に江州 住人(左) 山健明(花押) 井関是作也(右) (墨書)
17	若い男	縦 21.2 横 15.3	一材 右側部虫害 裏面素地	胡粉地わずかに残 る	
18	若い女	縦 20.0 横 14.3	一材 裏面黒漆塗 左側部欠損	胡粉地肉色 (剥落) 髪目齒黒 唇朱	アゴ部に 乙大夫 (花押) (墨書)
19	若い女	縦 20.5 横 13.7	一材 裏面素地	胡粉地肉色 (剥落多く素地が 出ている) 目齒黒, 唇朱	
20	老年の女	縦 21.5 横 14.2	一材 裏面素地 両側部虫害により 欠損	胡粉地わずかに残 る	 (花押)
21	空吹 (狂言面)	縦 18.8 横 15.9	一材 裏面素地 厚手の作	胡粉地わずかに残 る	二十 正月 一日 (墨書)



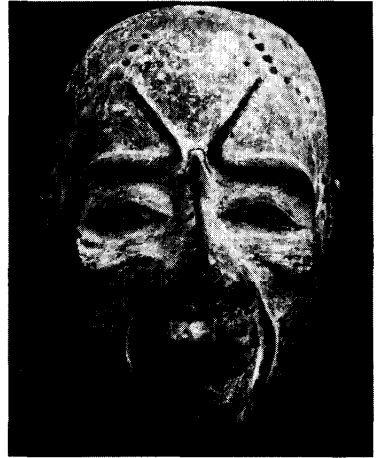
白色尉 (1)



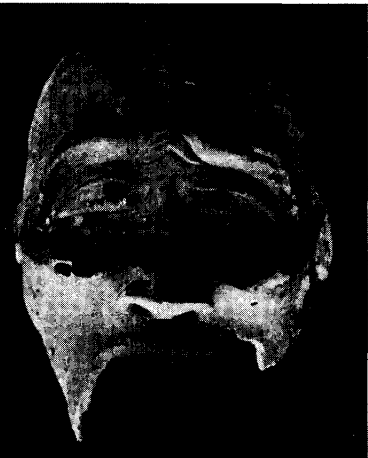
父尉 (2)



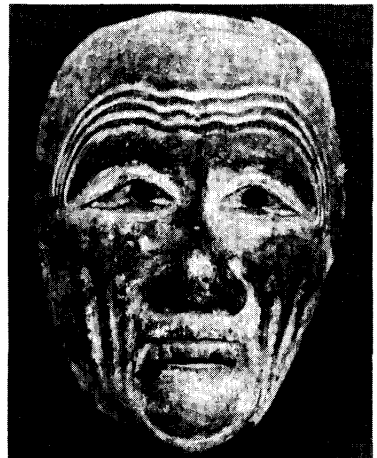
黒色尉 (3)



尉 (4)



尉 (5)

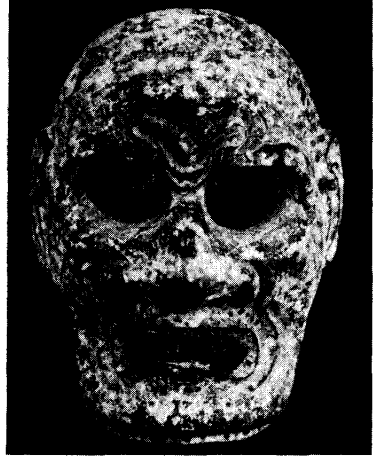


尉 (6)



鬼神（悪尉）

(7)



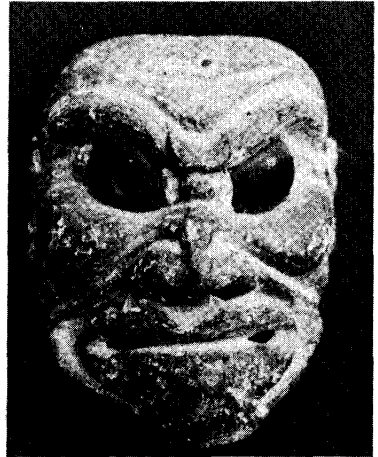
鬼神（悪尉）

(8)



鬼神（飛出）

(10)



鬼神（癒見）

(11)



鬼神

(12)



怨霊

(13)



鬼神（悪尉）

(9)

普通の能面に比べて大型のもので面の奥行も深く、頭部半ばまで覆う形式になっている。舞楽面などの古い様式をとどめているともいえる。類面が朝鮮にもある由で、仮面の伝承、変遷を考察する上で重要である。



怨霊（般若）

(16)

面の彩色下に「江州住人」「山健□（花押）」「井関是作也」と墨書がある。このことから、天文年間より四代続いた世襲面打家近江井関家の作であることがわかる。



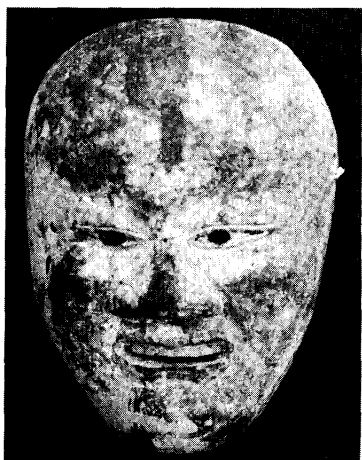
怨霊

(14)



怨霊(怪士)

(15)



若い男

(17)



若い女

(18)



若い女

(19)




老年の女

(20)


## 7. 小津白山神社

揖斐郡久瀬村小津字中島に鎮座。神社創建は、貞元2年(977)とされ明治6年(1873)大野郡揖斐谷地域の郷社となり、のち大正年間小津地内の各社を合祀した神社である。伝承によれば、小津集落は根尾谷の岐礼(揖斐郡谷汲村)方面から峠を越えて入った人々によって開かれたところとされ、また美濃木地師発祥の地ともいわれ、木地師としての古い歴史をもつ集落である。

この白山神社に残る26面の能面類は、近隣の日坂春日神社の能面と制作年代はほぼ同じ頃と思われる、どちらも素朴で写実性が強く能面の発生を考察する上で貴重な資料である。特に、髪を彫出している女面、鉢巻男など他にはあまり類をみないもので注目された。

No.	名称	寸法(cm)	材質構造等・彩色		銘記
1	白色尉	縦 17.7 横 14.8	顎別材 眉植毛痕 裏面素地	胡粉地白肉色 唇朱 冠台, 目 墨	
2	父尉	縦 14.6 横 15.3	顎別材(欠失) 裏面素地	胡粉地白肉色 冠台, 目 墨	
3	黒色尉	縦 17.7 横 14.8	顎別材 眉植毛痕 裏面素地	黒色(墨)	
4	延命冠者	縦 17.6 横 14.0	一材 裏面素地	胡粉地白肉色 冠台, 眉, 髭, 鬚 墨 頬部に朱	
5	尉	縦 21.5 横 16.3	一材 右半面部で割損 (漆にて接合) 裏面素地 髪, 鬚 植毛痕	胡粉地白肉色 唇, 皺朱 歯, 目, 髪 墨	
6	尉	縦 19.5 横 13.9	一材 裏面素地	胡粉地肉色 唇朱 全面剥落著しい	
7	尉	縦 21.3 横 15.6	一材 髭, 鬚 植毛痕 裏面吹漆	胡粉地黄褐色 目, 歯, 眉 墨 唇朱	花押  (刻銘)



No.	名称	寸法(cm)	材質構造等・彩色		銘記
8	鬼神(悪尉)	縦 23.2 横 17.7	檜一材 左側部割損 髭鬚植毛痕 裏面素地	胡粉地朱系肉色 唇,舌朱	
9	鬼神(悪尉)	縦 18.9 横 16.2	一材 右半面部割損 鬚植毛痕 裏面素地	胡粉地(剥落) 唇,目廻り朱	
10	鬼神(癒見)	縦 21.0 横 15.3	一材 裏面素地	胡粉地肉色 髭,齒,目墨 剥落著しい	
11	鬼神(癒見)	縦 19.7 横 12.9	一材 両側部割損 裏面吹漆	胡粉地朱系肉色 全面剥落	
12	鬼神 (鉢巻男)	縦 18.7 横 16.3	顎別材(欠失) 髪植毛痕 裏面素地	胡粉地朱系肉色 齒,目白色 唇,目廻り朱 眉,髪墨	
13	狐蛇	縦 21.0 横 16.2	一材 両眼金環 (右眼に一部残る) 裏面素地	胡粉地肉色 (剥落) 唇朱	
14	狐蛇	縦 18.5 横 13.8	一材 右側部割損 裏面素地	胡粉地肉色 (剥落) 唇朱 齒,目墨	
15	黒鬚	縦 21.3 横 14.0	一材 右側部・顎部割損 両眼金環(欠失) 裏面黒漆塗	胡粉地金泥色 髭,鬚,眉,髪墨 唇,舌朱	花押  (刻銘)
16	男	縦 20.0 横 13.4	一材 裏面吹漆	胡粉地肉色 髭,眉墨 全面剥落著しい	
17	若い女	縦 21.7 横 13.6	一材 髪部彫出し 裏面素地	胡粉地肉色 唇朱,目,髪墨 剥落著しい	

No.	名 称	寸法(cm)	材質構造等・彩 色		銘 記
18	中年の女	縦 21.7 横 13.6	檜一材 右側部割損 裏面素地	胡粉地白肉色 目, 眉, 髪, 歯墨 唇朱 全面剥落	
19	女	縦 20.1 横 14.2	一材 口くり抜きなし 裏面素地	胡粉地白肉色 髪歯墨, 唇朱 全面剥落	
20	姥	縦 22.9 横 14.6	一材 裏面吹漆 眉植毛痕	胡粉地彩色 剥落著しい	
21	猿	縦 16.6 横 12.5	一材 右半面部で割損 裏面素地	胡粉地朱系彩色 髪, 目墨	
22	鬼	縦 25.7 横 21.8	一材, 角欠失 髪植毛痕 裏面素地	胡粉地彩色 (剥落) 唇朱	
23	鬼	縦 24.5 横 19.0	一材 面中央部及び顎部 で割損 裏面素地	一部胡粉地は残る が彩色は不明 眉, 歯墨	
24	追儼面 子鬼	縦 26.9 横 23.3	一材 裏面素地 髪植毛痕	胡粉地朱系肉色 目, 歯, 角金箔押	
25	追儼面 子鬼	縦 28.7 横 23.8	一材 角別材(欠失) 裏面素地 髪植毛痕	胡粉地朱系肉色 歯金箔押	
26	不明	縦 21.5 横 12.2	一材 裏面素地	彩色なし 髪, 眉, 口墨がき	



白色尉

(1)



父尉

(2)



黒色尉

(3)



延命冠者

(4)



尉

(5)



尉

(6)



尉

(7)



鬼神（悪尉）

(8)



鬼神（癒見）

(10)



鬼神（癒見）

(11)



鬼神（鉢巻男）

(12)

この面は、鬼神系の面であるが、日本に数点現存するのみで非常に珍しいものである。

鉢巻を巻き、顎が翁面のように切顎形式になっていることや鼻の皺などが、この面の特徴である。



若い女

(17)

頬やまぶたや口元など全体の肉付けのとりえ方が、後世の様式化した女面とちがって、写実的になっており、重厚な味わいが感じられる。

髪も彫り出してあり、立体的なとりえ方がされていることが、この面の特徴でもある。



狐蛇

(13)



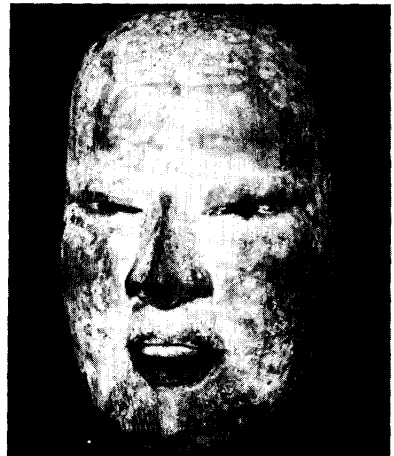
黒鬚

(15)



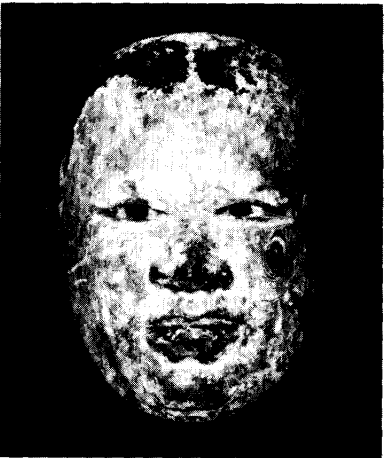
男

(16)



中年の女

(18)



女

(19)



猿

(21)

### 8. 葛原篠座神社

山県郡美山町葛原に鎮座。社伝によれば当神社は大永2年(1523)越前大野郡篠座大明神の分神を奉迎して創建したものとされ、大己貴命を祭神としている。

この地域は、古くから塩その他必需物資の交易を通して越前とのかかわりが深く、神社創建の由来もこうした交流の一端をうかがわせるものである。

ところで現在当社には、能面3点、小鼓胴1点がのこされているが、神社創建の縁起と合せ考えて、能面の由来にかかわる具体的記録を欠くものの、当地域を含む一帯に多くの影響を与えた越前猿楽とのかかわりを推察することができるものの一つであろう。残念ながら3面とも虫蝕が著しいが神社創建と同じ頃の作と思われるものである。

No.	名称	寸法(cm)	材質構造等・彩色		銘記
1	父尉	縦 14.5 横 13.7	顎別材(欠失) 裏面素地	胡粉地白色(剥落) 髪墨	
2	黒色尉	縦 14.5 横 13.8	顎別材(欠失) 鼻・頬部虫蝕 裏面素地	胡粉地黒色	
3	鬼神	縦 20.5 横 15.3	一材 裏面素地	胡粉地朱系肉色 髪・鬚・眉墨	



父尉



黒色尉

(1)

(2)



鬼神

(3)

この面は、黒い眉毛が太く、口元をひきしめ三角錐状に鼻が高くなっている。いわゆる天狗面の要素は備えているが、面貌は素朴で、鼻もさほど高くない。天狗面（鼻高面）の祖型ともいえるもので特に注目された。

### 9. 小野八幡神社

郡上郡八幡町小野に鎮座。承久2年（1220）武蔵権守藤原頼保が勅命により驚退治に出かけ、途中で八幡の文字の書かれた鷲の羽を拾った。それを当地の村人が御神体として、山頂に社を建てたのが、この八幡神社の起こりといわれる。その後永禄2年（1559）遠藤盛数が八幡城を築城の際、社殿を現在の位置に遷し、その後は歴代領主の祈願所となった。

この神社には3面の面がのこっているが、能についての具体的な記録はみあたらず、今後の研究に期待したい。

No.	名称	寸法(cm)	材質構造等・彩色		銘記
1	若い女	縦 21.0 横 14.0	檜一材 右頭部一部割欠失 裏面吹漆	胡粉地白肉色 鼻梁・両頬・顎部剥落 唇朱、齒黒	
2	御寮(狂言面)	縦 21.5 横 15.7	檜一材 裏面吹漆	胡粉地白肉色 (剥落)	
3	鬼神(癒見)	縦 21.0 横 15.8	檜一材 右側部割れ(修理) 裏面素地	下地黒漆 上彩色胡粉地朱系肉色 (剥落)	一(刻銘)





若い女

(1)



御寮(狂言面)

(2)



鬼神(癡見)

(3)

鬼神とかいて「きしん」と呼称し、邪鬼・悪霊を追い払う鬼をいう。鬼神には、口を開いた呵型の飛出などや口を閉じた呻型の癡見などがある。

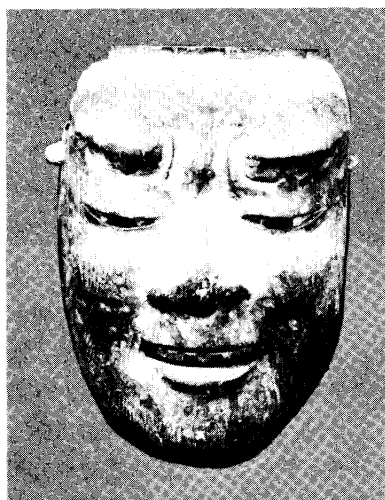
癡見は「べしみ」と呼び、口元に力を入れて強くへしんだ状態の面相をしており、このことからこの面を「べしみ」と称するという。

### 10. 川合六社神社

揖斐郡春日村川合に鎮座。祭神として速玉男神・天照大神・豊受大神・春日大神・八幡大神・伊弉册命を祭る。勧請の年代は不詳であるが、美濃神明記には従一位糟河大神とあるほどの古社である。

当社に残る若い男の面は、宝冠台がつき頬部には、エクボのようなくぼみがあり神の容貌をそなえている。しかし能面にはみない形であり、他の神事に使用したものと思われる。

No.	名 称	寸法(cm)	材質構造等・彩 色		銘 記
1	若い男	縦 19.7 横 13.9	一材, 宝冠台付 右頭部一部破損 裏面素地	胡粉地白肉色 (剥落) 齒墨	

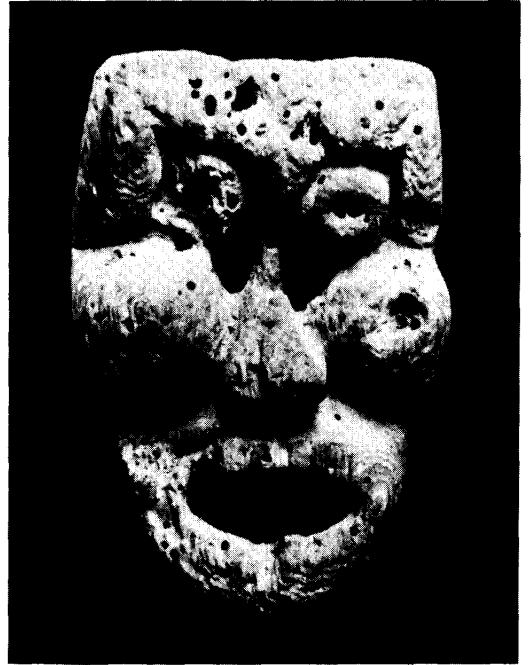
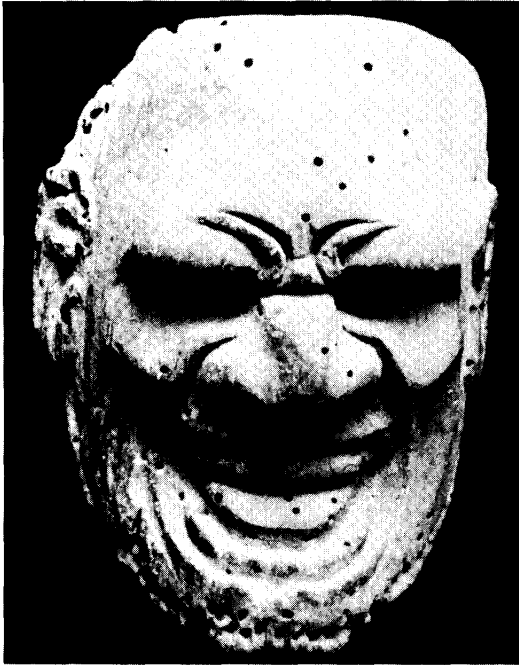


若い男 (1)

### 11. 上開田六社神社

揖斐郡徳山村大字開田字北カイ戸に鎮座。神社の創建は保元元年(1159)という。祭神は、速玉男神・伊弉册命・天照大神・豊受大神・春日大神・八幡大神を祭る。二面のこる仮面のうち、鬼神(悪尉)は、右目は下方を左目は上方をみるように削り貫かれている。このことは、天地間の悪霊を祓うことを意味するもので、能としての仮面ではなく、別の神事に使用したものと思われる。これと同形式のものが、前述の春日村川合の六社神社の若い男の面である。

No.	名 称	寸法(cm)	材質構造等・彩 色		銘 記
1	鬼神(悪尉)	縦 24.0 横 17.8	一材 鬚, 髭植毛痕 虫蝕孔 裏面素地	彩色はなしか 眉, 齒, 目墨 唇齒部に朱系彩色 がみられる	
2	不明	縦 24.8 横 16.5	杉一材	全体に虫蝕, 磨耗 著しく彩色等は判 定できない	



鬼神 (悪尉)

(1)

不明

(2)

## 12. 徳山白山神社

揖斐郡徳山村大字徳山字村平に鎮座。祭神は伊弉諾命・伊弉冊命を祀る。創建は神像に興国元年(1340)とあり、その頃と思われる。徳山村には他に櫛原・塚にも白山神社があり、白山信仰が盛んであったことがわかる。根尾村と共に近年まで越前との交流の深かったところである。

当社にのこる仮面は、能としての面ではなく他の神事に使用したものであろう。下記資料のうち1～5は紐孔があり、顔面につける形式のものであるが、7～9は裏彫りはなく彫像的なものである。

No.	名称	寸法(cm)	材質構造等・彩色		銘記
1	若い女	縦 26.6 横 17.8	一材 眉,目周線刻 両眼鼻孔ヌキ 裏面素地	髪,眉,齒 墨	
2	若い男	縦 20.8 横 13.5	一材 左額,唇,摩損 両眼,鼻孔,口ヌキ 裏面素地	彩色なし	
3	尉	縦 25.0 横 17.0	一材 面中央で割損 口部欠失 髪,鬚植毛痕 裏面素地	髪墨	

No.	名 称	寸法(cm)	材質構造等・彩 色	銘 記	
4	猿面断片	縦 15.4 横 14.8	一材 眼部より下欠失 髪植毛痕 両眼ヌキ 裏面素地	髪墨	
5	鬼面断片 (二片)	縦 18.5 横 10.0 横 11.5	一材 面中央にて破損 鼻部, 下顎部欠失	黒漆塗 口, 皺 朱漆	
6	鬼 その一	縦 26.6 横 19.8	一材 鼻部, 下唇部欠失 角欠失	朱 眼部墨	美濃国大野郡徳山村 久野治太郎作之 (墨書)
7	鬼 その二 (咩形)	縦 25.0 横 19.3	一材, 角欠失	朱 両眼墨	美濃国大野郡徳山村 江口玉治郎作之 (墨書)
8	鬼 その三	縦 25.5 横 19.5	一材, 角欠失 裏面素地	朱 両眼, 眉 墨	
9	鬼 その四 (首部付)	縦 26.8 横 19.0	一材 角欠失	朱 両眼, 眉墨 歯素地	明治八年 寅二月九日徳山村 徳山村江口栄助 三十六才之作



若い女



若い男

(1)

(2)



尉 (3)



鬼面断片 (二片) (5)



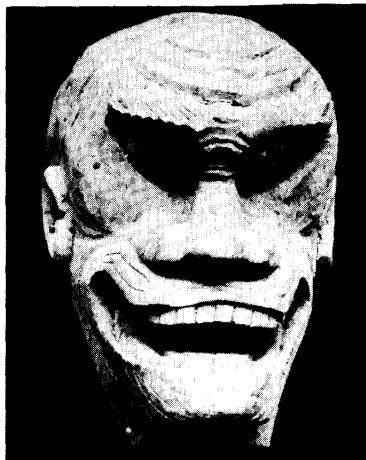
鬼 その一 (6)



鬼 その二 (喰型) (7)



鬼 その三 (8)



鬼 その四 (首部付) (9)

### 13. 二日町八幡神社

郡上郡白鳥町二日町字宮の端に鎮座。祭神として応神天皇を祭る。神社創建の歴史は明らかではないが、天文年間に社殿を焼失し、その後慶長年間に再建したという。

当社にのこるこの面は、相貌からして舞楽面納曾利と思われる。本来の納曾利面は吊り顎で、目も別材をはめこみ動くようになっているが、これは鎌倉時代の作と思われ、簡略化され一材できている。しかし納曾利面としての特徴とともに舞楽面の象徴性、誇張された表現があり、県下の仮面の中でも注目される資料の一つである。

No.	名 称	寸法(cm)	材質構造等・彩 色		銘 記
1	舞楽面 納曾利	縦 24.7 横 17.3 高 12.5	檜材, 鼻部別材 鼻頂部欠失 裏面下地布漆塗	下地布漆塗 眼部朱, 唇朱 顎, 耳, 鼻梁部剥落	



舞楽面 納曾利

(1)